

『海人藻芥』<sup>あまのもくず</sup>であり、「唐織物」の初出は一三三八〜一四七六年成立の『増鏡』である。つまり、南北朝・室町初期に、新しく登場した「唐」<sup>くわ</sup>という言葉が存在したということである。

もちろん、「唐衣」や「唐草」のように、平安時代以前から「唐」の付いた言葉は用いられていたが、その時代には無かった新しい「唐」<sup>くわ</sup>という言葉が登場したという意味である。

「唐織」という新語がこの時代に登場したということは、「唐刳り」説の有力な補強材料である。双方、工芸技術用語という点も共通である。

このようなことから、「からくり」の語源を「唐刳り」と見る考え方は、いよいよ蓋然性を高めるように思われる。

## 九、むずび

本稿の論述は多少試行錯誤のプロセスも含めたので、あらためて結論的要点をまとめておく。

「唐刳り」<sup>からく</sup>を語源と考え、「からくり」はその名詞化であろうとする。唐風に刳り抜くこと、つまり中国風(宋風)の彫刻という意味である。

「からくる」「からくり」は鎌倉時代に初めて現れた言葉と考えられる。南宋から禅宗が伝わり、宋風の禅宗建築様式を「唐様」と言った。その象徴が細かな細工の彫刻であり、それを「刳り形(繰り形)」と称した。唐様の刳り形を「唐刳り」(唐繰り)と言った可能性がある。初出は動詞なので、「唐刳る」(唐様に彫刻する)を語源と考える。それが、唐様に裝飾する↓唐様の複雑な木組みに造ると意味が派生し、名詞化して「からくり」となり、複雑な仕組み↓しかけ…と変化したと考えるのが、本稿の説である。

なお、からくり人形の工学的研究で知られる末松良一博士(名古屋大学名誉教授)にこの説を披瀝したところ、木地師の実態からも賛同できる説だとのご助言をいただいた。

木地師というのは、輻輳<sup>うくく</sup>と称する特殊工具を用いて、椀や盆など円形の刳り物を作る職人のことである。末松博士によれば、優れたからくり人形の製作技能を伝える岐阜県の久田<sup>くた</sup>見<sup>み</sup>は木地師と深い関わりのある村落だという。「刳り物」の製作技術が「からくり人形」の製作に活かされているらしい。「からくり」という語が「刳り」につながることになる。

ちなみに、木地師は、とち・ぶな・けやきなどの良材を求めて山から山へ移住しながら業を営んできた歴史があるという。全国に散在する木地師集団の根源地が滋賀県永源寺町だということも末松博士からうかがった。この町は、全国の木地師の身分を保障する制度のキーステーションだったらしい。つまり、木地師は全国組織の職能集団だったことになり、「からくり」という言葉の語源に関わるなら、その普遍性も予感させようか。

### 注

- (1) 司馬遼太郎・林屋辰三郎『歴史の夜咄』(小学館文庫、二〇〇六)で説かれている。
- (2) 『嬉遊笑覧』や『和訓栞』の説。駒の語源を高麗と関連づける説もあるが、「こ」が駒は甲類、高麗は乙類なので誤りらしい。
- (3) この解釈の問題点は、終止形(基本形)が「懸<sup>か</sup>る」ではなく「懸<sup>か</sup>く」であること。しかし、「名語記」が「懸る」という形で掲出している以上、そういう語法が鎌倉当時に存在したと考えるほかない。
- (4) 折口信夫『古代研究』ほか、『俚言集覧』『大言海』などの説。

麻練金」。その略が「へそくり」だというのである。この事例は、「からくる」↓「からくり」の変化に近似している。

②前掲『原色日本の美術』の解説によると、禪宗寺院の木鼻の立体的な彫りを「刳形」と言い、それを通常は「練形」と記しているであった。このことは、えぐって彫刻する意味の「刳り」と、糸をたぐる意味の「練り」が重なるか、もしくは混同されることの可能性を示していると考えられる。つまり、「唐刳り」が「唐練り」の意に解され、「からくり」という語が糸によって動かすことを連想させることもありえたということになる。

この点を加味して、語源からの派生経緯を整理すると、次のようになるだろう。

「唐刳る」⇨唐様に彫刻する⇨唐様に装飾する⇨唐様の複雑な木組みに造る⇨「からくり」という名詞形が一般化して「からくり」⇨糸による操作を含んだ複雑な仕組み⇨ゼンマイや糸によるしかけ。

## 八、「唐刳る」説の蓋然性

『日本国語大辞典』第五卷（小学館、一九七三）「からくる」の項によれば、「からくる」という語は方言に残っていて、青森県津軽と宮城県仙台では「修理、修繕などして間に合わせる」という意味で使われ、また宮城県では「飾りつける」という意味で用いられるそうである。その両意に共通するのは「細工する」だと思われるが、それはこの語が、元は「細工する」意を含むものであったことを示唆するものであろう。

ということとはつまり、「からくり」の語源が、鎌倉時代の唐様建築の彫刻用語と想定した「唐刳る」であったとする本稿の仮説を、

ある程度裏付けることになるかと思われる。

当初は、南宋風（唐様）の細かい手の込んだ彫刻をするという意味だったのが、やがて軒下や天井裏の複雑な組物（それが唐様建築の特徴）も含む意味に拡大したのではないだろうか。それが派生して「修繕する・装飾する」という意味でも用いられるようになり、方言として残っていると考えることは可能である。

また一方、このことは、「からくる」の語源を「絡み練る」とする説には否定的に働くと考えられる。なぜなら、「絡み練る」からは修繕・装飾の意味が派生する余地がないからである。

さらに「社寺建築の技術―中世を主とした歴史・技法・意匠―」（理工学社、一九九八）によれば、元興寺極楽坊本堂に隣接する禅室には、大仏様の特色を示す木鼻の練り型（刳り型）が見られるそうである。大仏様というのは天竺様とも言われ、俊乗坊重源が東大寺復興にあたり、宋の工人を招いて用いた新しい様式で、豪放で力強く、自由奔放な手法に特徴がある。東大寺南大門がその典型事例に挙げられ、禪宗様式の唐様とは区別される。

その大仏様の練り型があったということは、唐様の練り型をさす場合はそれと区別する用語でなければならぬ。それが「唐練り」、動詞「唐練る」だったのでないか。その可能性を想定しておきたい。ところで、「からくり」の語源が「唐刳る」（唐練る）だとして、はたして「唐くる」というような語法はありうるのか、つまり「唐」という語は動詞に結びつくのかということが気になる。

その例が一つある。能装束の「唐織」。この語が「唐織る」の連用形の名詞化だからである。つまり「唐刳る」「唐練る」は不自然な語形ではないということになる。

ちなみに、「唐織」の初出は応永二十七年（一四二〇）成立の

せ、「からくる」という動詞としても用いられた。

この説だと動詞より名詞が先行することになり、定説と食い違う。ただし、『名語記』の成立は前述のように一二六八年。円覚寺舍利殿の建築は二二八五年だが、臨濟宗大本山の建仁寺は二二〇二年の創建である。つまり、唐様の禪宗建築の始まりは『名語記』の成立より六十年以上前ということになる。名詞が動詞化する時間としては充分であろうが、語形変化として可能かという問題が残る。

## 六、新仮説

結論を先に言えば、「からくり」から「からくる」へ、つまり名詞先行説は、日本語の通常の変化として成り立ちそうにない。

「り」で終わる名詞だけを取り上げても、「誤り」「重なり」「うなり」「こだわり」「さわり」「たかり」「たたり」「語り」「下り」など、どれもとは動詞である。動詞の連用形が名詞化したものである。一方、「草履」「隣」「無理」など、「り」で終わる名詞は動詞にならない。「しゃっくり」は「しゃつくる」にならないし、「びっくり」も「びつくる」にはならない。

「り」で終わるもの以外でも同様である。芸能関係の言葉で考えても、「歌舞伎」は動詞「かぶく」(傾く)の名詞化だが、「浄瑠璃」は元來名詞であって動詞にならない。「ばさら」や「だて」も同様である。現代語には「愚痴る」とか「ケチる」とか、名詞に「る」を付けて動詞化したものがあるが、どうやらそれは近代の特異な語法と考えられる。

したがって、鎌倉時代に「からくり」から「からくる」が生じたとは考えにくい。鎌倉時代に「からくる」という動詞が存在したこ

とが『名語記』によって明らかかな以上、動詞が先行したと考えざるをえない。定説どおりである。

そこで、改訂した仮説を掲げてみる。

まず、「から」が「唐」であることは動かない。問題は「くり」であるが、これは「くる」という動詞だったことになる。

気になるのは、『名語記』の「懸く」+「る」の繰り返し「くる」になったという説。これをどう判断するか。つまり、「からからくる」が「からくる」になった、いや正確には「からかかれる」の繰り返しの結果だと『名語記』は言う。

これはいかにも苦しい。仮にその変化はあり得るとしても、もとの「唐懸かれる」(または「唐懸くる」という言い方があったとは思えない。「唐」と「懸くる」が言葉としてつながりにくい。「中国風に懸ける」などというのは、用語としての必然性が考えられない。

そこで浮上してくるのが前述の「刳る」である。「唐刳る」ならあり得る。つまり、もとは「唐様に刳り抜く」(唐様に彫刻する)という意味で「からくる」と言った。それが、唐様に裝飾する↓唐様の複雑な木組みに造る、と意味が拡大化し、やがて「唐練る」と理解されるとともに、「からくり」と名詞化して「機械仕掛け」の意味が派生した。

この説を新仮説の決定案にしたい。

## 七、新仮説の補説

前掲新仮説を補強または補足する材料を二点挙げておく。

①「へそくり」の語源は「綜麻練る」だという。<sup>4)</sup>「綜麻」とはつむいだ糸を巻いて環状にしたもの。綜麻を練って貯めたお金が「綜

で「構」という語が使われている。つまり、平安末期に「からくり」という言葉は存在しなかったと考えられ、鎌倉時代になって初めて登場した用語ということになる。

この語が使われ始めたと考えられる時代の知識人がどう認識していたかという意味で、『名語記』の説は傾聴に値すると思われる。

その判断のもと、「くり」の方はともかくとして「から」はいちおう「唐」だとしておく。

また、『名語記』の表現から、その当時は「からくる」という動詞であり、名詞「からくり」に先んじるらしいこともわかる。各種国語辞典の「からくり」の項に、「四段活用動詞カラクルから」とか、「カラクルの連用形から」などと説明されており、動詞の「からくる」が先にあったことは定説になっている。

さて、問題は「から」のこと。大陸の影響という観点から考えると、当時は南宋文化の影響を強く受けた時代だった。よく知られているのは、栄西や道元が宋に渡って禅宗を学んで帰国し、それぞれ臨済宗・曹洞宗を開いたこと。建築も影響を受け、その様式つまり禅宗様式を「唐様」と称している。円覚寺舍利殿がその代表的遺構であることは周知のとおりである。

## 五、「からくり」と唐様

鎌倉時代の唐様建築について、『原色日本の美術』第十巻「禅寺と席亭」（小学館、一九六七）巻末の解説「禅宗建築の様式」は、次のように説明している。

一三世紀にはいつてきた禅宗は、教義だけでなく、行事作法か

ら建築にいたるまで、すべての面で宋風を輸入した。

「宋風」というのがすなわち唐様のことである。根拠として栄西と道元の事例が上げられ、唐様建築の具体的な特徴として、次の点が指摘されている。

貫や台輪の先は柱より出て、そこに簡単な彫刻が施されている。これらを木鼻といい、立体的な刳り（モールディング）を繰形（刳形）、側面に描かれ、あるいは浅く刻まれた渦などを絵様といい、これらを一括して絵様繰形といっている。

つまり、唐様の寺院建築の特徴の一つが「繰形（刳形）くりがた」なのである。それを知ると、「唐様の繰形」という意味で「からくり」と言っていた可能性を考えたくなくなる。繰形の木鼻は軒下の彫刻なので目に付くと、同書には記されている。

「唐様の繰形」を「唐繰」と言っていたとするなら、それが唐様建築の象徴だった可能性がある。また、唐様建築の特徴は、軒下の組物が整然とした感じでいっばいになっていることや、装飾的で繊細なことが挙げられている。

実際、円覚寺舍利殿の内部はかなり複雑に組まれており、「からくり」的なイメージの構造のように見える。

そこで、一つの仮説を立ててみる。

鎌倉時代の唐様の建築様式は、装飾的で繊細な組物がふんだんに施されたものである。その象徴が「宋風すなわち唐様の繰形」つまり「唐繰」だった。「からくり」という語は、建築用語にとどまらず「細やかで精巧なかけ」を広く意味する言葉として派生的広がりを見

達原(黒塚)などでは、それを「柁柁輪わくかせわ」と称している。「からくり」とは関係ない。

このように考えると、「絡み繰る」説を正当と認めるためには疑問の余地があると言わざるをえない。

### 三、「から」が「唐」である可能性

前掲の語源諸説の⑤と⑥には、カラを「韓」または「漢」と考える説が示されているが、その線も捨てきれないのではないか。

いささか余談めくが、古代日本に機械文明を伝えたのは朝鮮半島の国、高麗(高句麗)だとする説がある。<sup>(1)</sup> コウライはコマとも読む。狛犬のコマであり、独楽も高麗から渡来したからコマと称すると説く文献がある。<sup>(2)</sup> 車輪の意のコマ、コマ送りのコマなども、機械に関する語にコマという語が用いられた名残かもしれない。

このように国の名前が文明を表す象徴的な語に用いられることがある。高麗のみならず中国も含め、機械文明が大陸から伝わってきたことは疑う余地がない。

よく知られているように「唐傘・唐紙・唐草・唐子・唐獅子」など「カラ」は大陸伝来の文化を象徴する語であった。唐のみならず、朝鮮半島の国々もひっくり返して「から」と称していた。霧島山の韓か国岳くにだけのように、「韓」をも「から」と読む例がある。

「からくり」を「機関」と表記した例が見られるように、この語には機械的なくみ・しかけという意味が含まれることから、「韓・漢・唐」の意でこの語に「から」を使った可能性を予測して考察を進めてみたい。

### 四、「からくり」の初出と『名語記』の説

「からくり」という語の初出は、鎌倉時代の辞書『名語記』<sup>みやうごき</sup>である。次のように記されている。

からくる如何。からは唐也。くるは、かくれるの反。懸る也。

「から」は「唐」だと説明しているのが注目される。「くる」は「かくれるの反」だという。「反」は「反対」の意ではなくて、「繰り返す」という意味であろう。「かくれる」を繰り返して発音して「くる」になったと言いたいらしい。

これに口語体「隠れる」を当てるのはもちろん誤り。文語体は「隠る」である。おそらく「懸る」の未然形「懸れ」に可能の助動詞「る」が付いた形であろう。<sup>(3)</sup> だから、そのあとに「懸る也」とある。そうすると、「懸けることができる」という意味になる。

『名語記』の初稿本は文永五年(一一六八)に出来ている。著者は経尊(素性は不明。僧侶か。園城寺法眼として名が見える経尊を当てる説がある)。当時の通用語を音節数によって分類したものをさらにいるは順に配列し、問答体で語源説明を加えている。全十卷から成り、「からくる」が取り上げられているのは第九卷である。

「からくり」の用例としてその次に古いのが室町時代の『文明節用集』だから、『名語記』が格段に早い。

一方、平安末期の『今昔物語集』巻第二十四に、高陽親王(賀陽親王)がからくり人形を作ったという話が記されているが、そこには「からくり」という語は用いられていない。「からくり」の意味

# 「からくり」語源考

林 和利

## 一、はじめに

「からくり人形」とか「からくり眼鏡」などと用いられる「からくり」という言葉は、その語源が明確でない。いちおうの通説はあるが、それ以外の諸説も様々あつて確定していない。本稿は、この語の初出や用例を根本的に洗い直して、より確かな新説を立てようとするものである。

## 二、「からくり」の語源諸説と通説批判

「からくり」の語源について、前田富祺編『日本語源大辞典』（小学館、二〇〇五）には次のような諸説が紹介されている。

- ①カラはからまく、からみ、からめるのカラで巻く意。クリは練の意（嬉遊笑覧）。カラミクル（絡繰）の意から（大言海）。
- ②虚牽の義（和訓栞）。
- ③カハリクリ（変転）の約転（言元梯）。
- ④カルクリ（軽繰）の転（名言通）。

- ⑤カラクリ（漢繰）の意（夏山雑談）。
- ⑥カラは暗いこと。また、わざのことで、人をくらます意。または妖術のようであることからカラクリ（韓来）か（和語私臆鈔）。

要するに、諸説あつて定まらないという状況である。

各種国語辞典の類は「からくり」の項目に「絡繰・機関」と字を宛てて立項している。そういう用例があるからだが、特に「絡繰」を宛てる辞典が多いことから、どうやら語源を「絡み繰る」と見る立場が一般的らしいと推測できる。それをいちおう通説と見ておく。しかし、たとえば「絡み取る」という言葉があるが、この語は「から」とか「からとり」という形に変化しない。つまり、「絡み繰る」↓「からくる」↓「からくり」という語形変化がありうるという証明ができないのである。そもそも「絡み繰る」などという用例は、管見では見当たらない。

また、『新明解古語辞典』補注版（三省堂、一九七三）によれば、「絡む」は巻き付けるといふ意味であり、「繰る」はたぐり寄せて集めるといふ意味だと説明されている。つまり、「絡」と「繰」の両者をくつつけても「からくり」の意味にはならない道理である。糸をたぐり寄せて巻き付けるとは糸巻き車であるが、謡曲「安